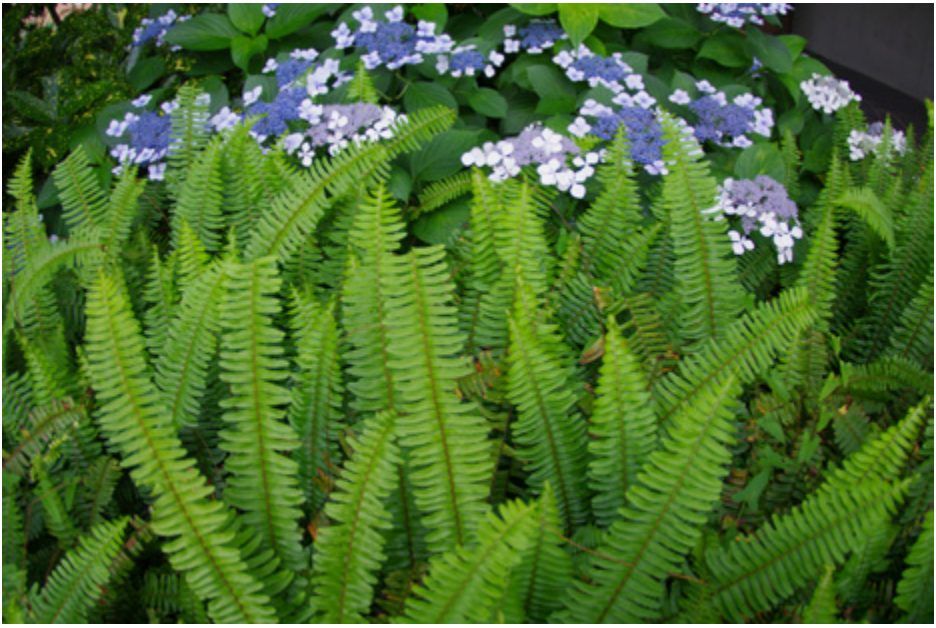
あさ 6

2014



遠きミャンマー

縞柄の壁虎壁畫の佛這ふ

佐藤喜孝

あと

六　月

うぶごゑ

佐藤喜孝
東京

直情や白梅うぶごゑ三八銃

シャキシャキと春の水切る花鋏

家の釘何本も抜き春をはる

パラボラの神あふぐむき若緑

若菰に入りたる波の出でて來ず

生きてゐるふりして筍流しかな

青梅を根こそぎ抜きて家を捨つ

季寄に藜は「茎を乾燥させて杖とする」とだけあった。これでは夏の季語にならない。私は子供のころ藜を食べた記憶がある。近年どんな味だったか忘れたので妻にお浸しにしてもらった。不味かった。「轉ばぬ先の藜の杖やしなふ　中原道夫」「髭欲しや藜の杖を突くからは　後藤比奈夫」と食料としては詠む機会がすくない。忘れられないのはフスマの煎餅である。喉を通らなかった記憶がある。今「フスマ」でクックパッドを開くと「ふすまたっぷりのvegeな…」とおいしさうなクッキーの写真が出てくる。vegeとはなんだらう。私の口にしたのはトウモロコシのフスマである。ある日「関東ラジオ」を流してゐたら高島茂が出てきて野草の食べ方の話をはじめた。後年その話をしたら照れて笑ってゐた。「マルクスも神もなしただ藜採る　茂」としっかり茂は食べてゐる。それにしても世智に暗い父母が子供四人をよくあの食糧難の東京で食べさせたなあと、思ひ出すたび感謝してゐる。

☆

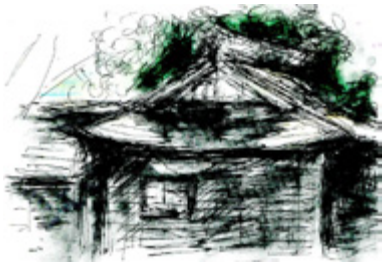
竹内弘子
埼玉

カステラの木函のしめり彼岸過
枝凝りてかぐろきあたり小鳥の巣
目も鼻もかくれむばかり田水張る
窯変のごとき襖絵施餓鬼寺
花屑のながれ入るまま鯉の口
米つぶを素足に踏んで母の日なり
行水やすべすべと女児うら返し

清　明

田中藤穂
東京

昭和の歌百曲花の雨一と日
清明や土に降りくる雀たち
鳥曇夢二の墓辺ぬかるみて
夜の雷満開の花揺すぶれり
囀りやお客の少女縁側に
春満月出しと電話のかかりくる
花筵より若やぎし笑ひ声



一年の中で若葉の季節が私は一番好きだ。でもそう思えるのは健康で幸せなのかもしれない。この季節は毎年自殺者や事件が増える。心身が疲れた時は私も桜の花にも若葉にもちょっと気押される気持になることもある。でも桜の時期が短い様に、若葉もああきれいと思っているうちに日々刻々と変ってゆく。この時を見逃しては勿体ない。

隣の桜も今はすっかり葉桜だ。うちの塀の蔦も芽が出たと思ったらみるみる葉を拡げ、山櫨の枝も緑の葉を天に見せ始めた。来年は見られるかなと思うと一層美しく思えるのは老年の一得というものです。

以前なら今頃は鯉幟があちこちに泳いだのですが……。

若葉

長崎桂子
三重

花の昼もてなし小まめ酔まはる
引立てるライトアップや花三分
楽の音と人声とだえ花の闇
散り頻り水面をはしる花筏
若葉風ゆるゆると行く老夫婦
若葉風乳母車とめ話込む
若葉雨カラフルな傘登校時

やっとぽつぽつと庭に蒲公英が顔を出してくれました。四月三日の夕方にふと気がつきました。此の日は暖かいより暑さを感じた昼間で、思わず、救急車の音が近かったので外へ出た。後でお聞きしたのでは、御近所の七十二歳の男性が突然倒れられたそうで、夕暮時には帰られたとの事、熱中症だったのかしらと思った出来事の日に気がつきました。

蒲公英は去年の三月の下旬に、もう咲いていたように記憶していた。毎年芽吹き、目も覚める黄色の花を咲かす黄水仙と同じ頃、小さく淡い黄色で、狭い庭に、今年の始まりを告げる如く咲いてくれました。

今年は遅れたが四本咲いております。今まだ、朝夕は冷えるので影響するかしらと思う此の頃です。

一輪草

森理和
東京

岩礁のしぶき激しく豆の花
囀の姿に見入り湯中りす
懐かしきポスト置く宿春惜む
忽ちに包囲されたり春霞
一瞬に糞を残して蛙消ゆ
名も告げず問はずに別れ一輪草
小さき巣の壊され下がる若葉雨

☆

吉弘恭子
東京

泰階や何時ものやうに花が咲き
はかなくて美しき莟のさくらかな
磯馴松春の日差にむき合ふて
ベンチから腕にうつる春の月
菜の花や素描にはらとこぼれくる
強かな口のすべりや春の鳥
考よりも少しつよいぞ温酒

花　道

赤座典子
東京

せせらぎの底に芥菜煌めけり
枠の俯ける花夥し
練切の桜に終る花見かな
ゆるゆると湯に消えてゆく花疲
四月馬鹿我が惣菜を鍋島に
ふらここや肉じゃが好きの一才児
ビル街の幻と化す春満月

ラヂオから臨時ニュースで流れてきたのは「日本国憲法第九条」を保持している日本国民にノルウェーオスロのノーベル委員会から推薦を受理した旨の連絡が入ったとのこと。パソコンを打っていた私の耳を疑ってしまった。寝耳に水とはこの事である。はやる気持を落ち着かせるのに苦労した。

正式に日本国民がノーベル平和賞候補になったのだ。

日本国憲法は占領国から押し付けられたものだと巷では言われ続けてきたが良いものはいいと。二十歳の時の思いが今やっと世界の人々にアピールできるのだ。

一市民の思いが多くの方々の賛同を受け、このラヂオから流れてきた声に何故か熱きものがこみあげてきた。この九条があったればこそ喧々諤々と句会を楽しんで来られたし、大好きなスポーツ特にサッカーたとはテレビ観戦、サッカー見るだけに名古屋まで出かけた。りとたのしんできた。子や孫の代になっても父や母が悲しんできたことは知らなくていい。と切に思っている。日本国民が推薦されているのだから私も国民の一人として応援したいと思っている。

非武装・非侵略・戦争放棄の精神に賢い世界の人々が思って下さることを切に思っている。あまりの嬉しさに似つかわしくない文章をのせってしまった。

y.akaza

☆

井上石動
山梨

黒髪のほつれひとすぢ蝉丸忌
一滴のびっくり水や含羞草
明日は発つつもりの宿や河鹿笛
ふいに来て夏花揺らせり朝風
何語るさくらんぼうの木の下で
朗らかに山椒薔薇の開きをり
呼子鳥厚き大気の流れ来ぬ

春深し

大日向幸江
埼玉

筍の寺の床下顔を出し
白木蓮清浄なるも仄暗し
通し鴨陽は中天にかかりけり
春深し若者らしき人体図
風光る出雲の旅に出ることに
絹雲の広がる朝や卯月果つ
春愁の若き僧侶や髪を剃る

「やはり」考

「やはり～」。この発言の発露回路を探ると……

①私はそのことを、充分熟知している。②ゆえに、その熟知から、充分予想できた。

解説などで、この「やはり」を度々連発する人々がいる。スポーツの場合、①引退早々の元選手。②己の喋りに酔って、まくし立てる人。こういう解説は、音声を消して観るに限る。

最悪は大学教授。社会教養番組に登場すると、このオンパレード。「はいはい、貴方は全てお解りでしょうよ。でも「やはり」、と俺ら素人に言われても困るよ」と、画面に向かって「与太」を飛ばす。「語る」ことを職業とする人は、「喋り」を勉強して欲しい。

皆さんのお孫さんの「学校の先生」は大丈夫ですか？たぶん下手。何故なら教員養成講座に「語り」のコマなどないから。付きあわされる生徒こそ「悲劇」ですね。

プロ俳人も同様。25分番組中「あの～」「え～」を、合計138回も連発する先生もいる。

スポーツ関連で、最高の「喋り手」と思うのが、元NHKスポーツアナの山本浩さん。余計な言葉を挟まず、間かよく、情も籠り、理路整然。最高の語り人。

四月馬鹿

木村茂登子
神奈川

四月馬鹿閻魔大王休業日
一日の豪華絨緞桜蕊
仏殿に座を賜りて降誕祭
目の玉の裏側にあり干し金目鯛（きんめ）
桜鯛命いただきますと手を合せ
ドレッシングに甲と乙あり春野菜
飴色に炊める根気新玉ネギ

四月馬鹿はもう死語になってしまったかと思いながら上記の句を作ってしまった。以前は互いに冗談と笑い合ったものだが、

四月馬鹿獲物の方が上手にて

の一句ともなってしまった。

いっ時人を欺くのはなかなかむずかしい。相手を怒らしてしまう内容であってはならない。笑い合って終るのである。

私たちの世代は腑に落ちぬ場合は、「本当？」と聞き返したが、今時の人は「ウソッ」と咄嗟に切り返してくる。これでは四月馬鹿は成立しない。嘘で思い出したこと。

「何が大嘘だって、嘘をついたら閻魔に舌を抜かれるってのが嘘の中の一番の大嘘さ。」

あるテレビドラマの中の啖呵でした。

☆

斉藤　裕子
東京

ジュリアンや手毬のごとく咲き揃ふ
ゆっさゆさと揺れて満開花つつじ
躑躅咲き道ゆく人と声交す
莟見れば抜くのもいとし白十字
角つけて剪られし垣根白丁花
蕗茹でて皮はぎながら句を捻る
さつと茹で蕗は剥かれてあさみどり

春から夏へ

篠田　純子
東京

花水木托鉢僧の列に逢ふ

蛮声は大使館前春闌る

折紙の折り方忘れ著莪の花

雨宿りしつつ葉裏の尺取虫

五月場所　三句

徳俵へずりずりずりと薄暑かな

足跡を消しつつ下がる皐月闇

後頭部に涼風の立つはね太鼓

湖東三山で秘仏開帳と知りゴールデンウイークに出掛けた。何でもご開帳は、住職一代に一回とか。しかも三山いっぺんには有り得ない事らしい。

京阪の観光バスガイドさんは、各寺三百段登りますと私を見ながら説明する。先ず金剛輪寺へ。バスはかなり高い所迄行ってくれた。行基作の鉈彫りの素朴な観音拝観。昼食後西明寺へは食事した店のマイクロバスでピストンで連れて行ってくれ、薬師如来の優しい姿を拝めた。問題は、百済寺の石段のキツイ事。杖に縋ってようやく観音様を拝した。

いずれの仏も古く素朴で心に沁みた。年長者の私に優しいガイドさんへ、バスをおりる時有難うと言った。パワーを貰った気がした。

壺中の天

定梶じよう
石川

春の雨物干台も濡れにけり

ひとがみな言ふのでさうか今日ぬくし

ひとりっ子卒業父方母方ゆ

ひとりただ干潟を歩くすべをなみ

かたくりの花や測量助手踏むな

田にしの句県民手帳もて記す

落花いま壺中の天にあるごとし

三月号のあとがきで喜孝さんは正直に自らのミスを仰有っている。できないことだ。

当然のことながら私もよくミスを冒す。むかし、〈遅き日に飽いたり潮さゐにも飽くる〉という句を投稿した時のこと。活字になった句をみて、違和感がある、何か変だ、と思ったのだった。「飽きる」「飽く」を辞書で繰ってみると、「飽きる」は近世後期頃より江戸で遣われ始めた語であり、飽きない、飽きて、飽きる時、と活用する、とせつめいされている。一方「飽く」は、現在でも関西で使われて、飽かず、飽きて、飽く時、と活用する、とある。

というわけで、「飽くる」という形はどこからも出てこないのだ。

ひとり恥じて公言しなかったのは、勇気がなかったからだ。

身延山久遠寺

須賀敏子
埼玉

久遠寺や善男善女糸桜
重厚に総本山の桜かな
神木に大きな瘤や春北風
三椏の花の多さや奥の院
目薬をさしていつもの桜かな
句会の日子の子元気に一年生
鈴蘭の咲いてめでたく古稀の人

四年目の

二〇一一年四月の第一水曜日、身延山久遠寺の桜ハイキングを予定していたが、三月十一日震災があり中止を決定。十二年十三年は天候に恵まれずに中止。そして四年目の今年四月二日、穏やかな天気に恵まれバスで出発、身延の町へ入るといたるところにしだれ桜が満開である。

まずロープウエイで身延山山頂へ、三椏の花が多く見られた。ハイキング東コースをゆっくり二時間程歩く。大光坊付近はまだ二分咲きだった。久遠寺本堂、樹齢四百年といわれるしだれ桜は満開である。

やっと四年目にして出会えた桜は大いなる生命に溢れていた。

あをキーワード俳句辞典（きみ―きも）

黄身・黄味

寒卵黄身も白身もたしかなる　芝　尚子
春待つや卵を割れば黄身ふたつ　芝　尚子
寒卵黄味にひとすぢ血のはしる　鎌倉喜久恵

君が代

君が代は呟きてこそ花ひらく　堀内　一郎
五線譜の上君が代も賛美歌も　木村茂登子
君が代や日本ダービー雨の馬場　木村茂登子

黄緑

黄緑の稲穂そろひて天を指す　赤座　典子
うす赤み黄みどりへ蛇穴を出る　長崎　桂子

君の名は

梅雨に入るかつてラジオに『君の名は』　定梶じょう

奇妙

物干しにあまたの軍手奇妙な町　定梶じょう

決め

八十は人ごとと決め秋近し　芝宮須磨子
九条や孤島の鳥は飛ばぬと決め　佐藤　喜孝
木の葉散るけふのあしたと決められて　東　亜　未
哀しみに寄り添ふと決め冬ぬくし　須賀　敏子
初旅はエジプトと決め夢うつつ　森　理和
長旅をせぬと決めたり冬の草　赤座　典子
腰紐で決める着こなし初袷　木村茂登子
買物はパンと決めたり雪の道　早崎　泰江

肝

阿波踊肝にひびける太鼓の音　吉成美代子
生き肝を奪はれさうや火蛾の数　田中　藤穂
肝煎で再就職す桜東風　篠田　純子
噛みきれぬ肝吸のこす二十日かな　竹内　弘子

着物

初夢の母に着物を着せてもらふ　田中　藤穂
春ショールまとひしままの着物展　赤座　典子
炎天へ着物で一歩踏み出せり　芝　尚子
赤の飯生涯着物で通しけり　篠田　純子

鬼門

天道虫鬼門に笹の繁りたる　芝　尚子

前月抄

老の歩に冬草いく本追ひこされ　佐藤喜孝

夕暮れて白木蓮のやはらかに　須賀敏子

風邪に伏しサーカスを見たしと思ふ　竹内弘子

復活祭菜を茹でし湯の金色に　田中藤穂

車絶え足音も絶え春の音　長崎桂子

空威張りのごとき春雷通り過ぐ　早崎泰江

亡き兄の病状用紙竹の秋　森　理和

風光る身体にたまる葉緑素　吉弘恭子

艶消しの黒豆のあり雛あられ　赤座典子

春炬燵志貴の歌など眺めゐて　井上石動

一枝に雀の家族四温の日　大日向幸江

家霊そこにおはしますかに雛の間　木村茂登子

子も母も這ふやうにして蟻の穴　斉藤裕子

コンビニで無駄使ひする桜の夜　篠田純子

喜寿米寿卒寿集ひて春の寄席　芝宮須磨子

教育に關スル勅語春燈下　定梶じょう

喜孝　抄

五月作品より

木村茂登子・佐藤喜孝

おにぎりのまんまんなかに母の日は　佐藤喜孝

はじめ、上五中七と下五がつながらなかった。が、距離感は感じられなかった。

何度も反芻してみることにした。

繰り返しているうちにおにぎりがいつのまにかおむすびになってしまっていた。

どちらも物としては同じである。〝手塩にかけて〟といふ言葉はここから出たと聞いている。

そうだ、この句、喜孝氏の母上に対する恩愛の句なのだと悟った。

母さんに相談のある春の宵　田中藤穂

歳時記に、〝春宵はあらゆるものが懐かしいのである。〟とあった。「母さんに」この言葉にも懐かしさがあふれている。

お子さんから何か相談があるという。春の宵である、出来ない相談ではないはず、母さんはあたたかく待ち受けているのだ。

空威張りのごとき春雷通り過ぐ　早崎泰江

春の雷怒るに力貸してくれ　吉弘恭子

前者は雷に恐れを抱いているのに離れて通り過ぎたことにホッとしてご本人が空威張りしているようにも思われ、後者は日頃は怒ることなど出来ないのに、虎の威を借りるように便乗して怒ってしまった。

第三者にとってお二人の光景を想像すると愉快（？）でもある。

背流すやうに墓石と春彼岸　森理和

兄上お二人を亡くされた理和さんの亡き人への思いが切々とひびいてくる句です。

子供の頃行水で背中を流してあげたことなど思ひ出されていたのでしょうか。

〝背流すやうに〟に深い愛情の念をかんじます。

春炬燵志貴の歌など眺めゐて　井上石動

万葉集中第一の秀歌といわれる志貴皇子の御歌。とうとうと流れほとばしる瀧の上に萌え出した早蕨。うららかな早春のゆったりした気分で書を手にしている作者。

歌を眺めているとは。

シャンソンを原語で理解したいと五年もフランスにいたという作者、もしや万葉仮名で読んでいたのでしょうか。

ぶらんこをこいでる夜のホームレス　篠田純子

〝命みじかし恋せよ乙女〟名優志村喬の厚い唇から呟くようにこのメロデーが流れて終わった映画を思い出した。

人生には山あり河あり、ホームレスの一ト言では云いつくせない人の姿に粛然とさせられるが、あらゆるしがらみを自ら捨てて世俗から解放された人もいるという。

ぶらんこの人も哀れとばかり云えないかも知れない。

（以上　木村茂登子）

夕暮れて白木蓮のやはらかに　須賀敏子

日中はキラキラとした強靱とも思へる白色の花も、日の傾くにつれやはらかくなってきた。

この「やはらかに」の感覚は白木蓮の継続凝視のたまもの。

風邪に伏しサーカスを見たしと思ふ　竹内弘子

熱があるときの脳は通常と違ふ働きをする。人様の頭の中は分るはずもないが、おしなべて同じやうなものではないかと思ふ。同じ夢を嫌といふほど繰返し見させられたり、幻覚などもあり気持のよいものではない。サーカスが見たくなると言ふ作者の風邪の症状はどんな状態なのだらうか。

復活祭菜を茹でし湯の金色に　田中藤穂

復活祭と聞くと恥かしい思ひ出がある。戦後、小学生の私は坂の上の教会の日曜学校に通ってゐた。一年に一度クリスマスの時にいただくプレゼントの為に通ってゐたやうなものだ。讃美歌を唄ったのだが殆ど覚えてゐない。信じやすい私は神様は生返ると言ふ話を本気で受止めてしまった。掲句の金色はさぞや美しかった事だらう。驚き、感動が素直に復活祭につながったと思ふ。

車絶え足音も絶え春の音　長崎桂子

車の行き来も絶え、人通りも絶え静かになった深夜。しかし、無音の世界に耳を澄ませば春の音が聞えてくる。作者の若さと心耳に乾杯。

空威張りのごとき春雷通り過ぐ　早崎泰江

期待と違ひ肩すかしを食らったやうな春雷。空威張りと雷を茶化す。春雷とお話ししてゐるやうだ。〝ごとき〟はこの句には不要。

艶消しの黒豆のあり雛あられ　赤座典子

白・桃色、翠などに彩られた雛あられ、まあきれいと言ひながらよくみると黒豆が異物のやうに入ってゐる、しかも艶消しで。「艶消しの黒豆」凡庸なやうに見えて、一皮違ふ句に仕上げた。

マカデミアンナッツもブレンド雛あられ　木村茂登子

一枝に雀の家族四温の日　大日向幸江

一枝に横並びで雀がとまってゐる。家族でひなたぼっこをしてゐるやうだ、と作者にみえた。読む人のふんはりとなる句である。

子も母も這ふやうにして蟻の穴　斉藤裕子

蟻の穴から出入りしてゐる蟻のやうすを頭をつき合はすやうにして観察してゐる親子。「這ふやうにして」がその場のやうすが見えてくる。子供だけでなく母もさうして見てゐるところにほほえましさが倍加した。

コンビニで無駄使ひする桜の夜　篠田純子

無駄使ひも役所などの公金無駄使ひともなると財布に中に入らない金額である。いくらから無駄使ひといふことではない。むしゃくしゃしたときなど浪費をする癖のある人がゐるといふ。この句は桜の夜である、反対にうかれて無駄使ひをした。無駄とも思へる明るい照明のコンビニでの一齣。

喜寿米寿卒寿集ひて春の寄席　芝宮須磨子

春の日をゆたかに二人喜寿米寿　和泉喜代子
春炬燵囲むはらから喜寿米寿　柳澤宗正
卒寿喜寿祝ぎ臘梅の高香る　久保田雪枝

などあるが、「喜寿米寿卒寿」とそろへた豪

華な句は珍しい。しかも寄席で大わらひをしてゐるのであるからなおさら目出度い。

教育に關スル勅語春燈下　　定梶じょう

教育勅語の正式名が「教育に關スル勅語」と知った。十二の徳目を見ると自己を鍛え周りの人々と仲良くといふ事が書かれてゐる。最後の徳目「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」だけが突出してほかの徳目と違ふ。一九四八年にこの勅語は失効した。私が七歳の時となる。勅語も憲法も解釈次第、運用次第でいかやうにもなるもののやうだ。

作者はこの勅語を読み上げた世代であらうか。春燈下にこの勅語を繙いてゐる作者。沈黙の作者の意図は那辺にあるのだらう。

（以上　喜孝）

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2014年7月号

語り継ぎたい俳人たち
～高濱虚子、水原秋櫻子、西東三鬼、日野草城、能村登四郎など、俳句史に燦然たる足跡を遺した俳人たちの功績と意外なエピソード
特集 深見けん二　水原春郎　宇多喜代子　今瀬剛一　他

〈グラビア〉俳句界NOW 上田日差子

作品 辻桃子　小澤實　岸本尚毅

★曾孫3人主宰就任記念
男の時代がやってきた！ 伝統俳句新時代へ！
高濱虚子曾孫対談
《特別企画》
稲畑廣太郎「ホトトギス」
星野高士「玉藻」
坊城俊樹「花鳥」

◆注目の句集　橋爪鶴麿『祷りの木』
※セレクション結社　「円座」武藤紀子

私の一冊　浅井民子「帆」

魅惑の俳人　荻原井泉水

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
重松清（作家）

※一部変更の可能性があります。
株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

わが敬愛する俳人たち

―百日紅乙女の一身またたく間に　草田男―

阿部寒林

海を渡る　橋本多佳子

昨日海に勃かりし星枯野に座る
煙草火にも由布の枯野の燃えやすき
狐の皮干されて枯るゝ野より悲し
凍る嶺の一つ嶺火噴きはゝからす
赭崖の氷雨の八幡市すぐ暮るゝ
鵯群れ鳴く見ればわが頭も雪ふれる
歌留多よみつぎてゆく読み減らしゆく
敵の歌留多一つの歌がわが眼牽く

橋本多佳子

多佳子先生が『天狼』創刊同人として（昭和二十三年一月）発表された作品は次の十句である。

炎天の梯子昏きにかつぎ入る
炎天に老婆ものいふ口うごく
蟻地獄孤独地獄のつづきけり
蟻地獄悲しき刻の過ぎてゆく
幸福な日には忘れて蟻地獄
今日生きてむさぼりゐるや蟻地獄
三日月に死の家ありて水を打つ
いなびかり北よりすれば北を見る
燈が消えて野にあるごとしいなびかり
女の眼に男が炎ゆるいなびかり

この中の「北を見る」は当時よく体験するので特に注目した覚えがある。中央線がまだ

新宿―三鷹間が高架ではなかったので阿佐ヶ谷の踏切でよく北の秩父方面のいなびかりを眺めていたので忘れられない句となった。後年この句は奈良西大寺に句碑建立となった。

東京生れの多佳子先生は関西の橋本家に嫁ぎ四女を設けられたが（淳子・国子・啓子・美代子）いづれも東京での家庭生活である。ただ四女の美代子さんだけは、晩年の母と共に東京から奈良生活に入った。多佳子先生は天狼同人となってから東京天狼句会が（毎月

第四日曜日）催される度によく出席された。これは娘さんたちがそれぞれ東京に居られたからである。戦後の不自由な日常でも宿泊その他のことには欠くことはなかったからである。

東京句会には秋元不死男・孝橋謙二・三谷昭・高屋窓秋の在京同人四氏であったが、多佳子先生の参加予定は同人以外の私たち参加者には知らされない。句会に行ってみて初めて分かるという具合であった。紅一点の先生が居ると居ないとでは会場の雰囲気が異なり、明るく充実感が漂っていたのを記憶する。互選のない当時の句会は全同人の講評が必ず行はれたのでいい勉強になったと思う。多佳子先生は上京の度に出席されたので参加者の私達も多佳子選には特に興味を抱いたものである。何かの記念句会の時に多佳子特選に入った私は賞として短冊を頂いた。これが今日迄唯一の多佳子直筆の短冊となった。

いそがざるものありや牡丹に雨かゝる

東京句会を除いて個人的にお会いする機会があった。ある寒い日、八田木枯さんと二人で六本木の長女か三女かの家の二階であったと思う。私たち二人は少々緊張気味であった。が、それもすぐ解けたのは先生が熱い紅茶にブランデーを注いで呉れたのを頂いた時からであった。句会では面識があっても個人的となると違ってくる。年代から言うと昭和二十年代の後半なのは確かである。なぜかと言えばこの時、天狼への投句予定の一句の評をお願いしたからである。木枯さんも同様で一句お願いした。殆んど記憶にないが確か「鉄橋」を素材にした句だったと思う。私は「地図にも長き海岸線は雪を被る」であった。二人の句を見てすぐ

雪解けし後も枯野として残る　東京　阿部　寒林
風花や停れば日射す汽車の中　津国　蘆刈
月明の玻璃戸の内に手を洗ふ
晩秋の旅の車窓に灯が増えくる
契りたる女ひたすら毛糸編む　ムネタ初夫

「いい句だわ、絶対ョ！」と絶賛して呉れたがこれは決してお世辞ではなく、この二三ヶ月後に誓子選後評に採り上げられたことで納得できる。

二度目の時も木枯さんと共に目白の次女、国子さんの邸宅であった。いまでも記憶にあるのは通りから一段と幅の広くて段差の低い階段を何段か下がって門構えの家に入った事である。目白のどの辺りになるのか、いまは全く不明である。「此処の庭にはいろんな鳥が来るので楽しめますョ」と庭に眼を向けながら話されたのは印象深かった。この時は俳

句の話は殆んどなく『七曜』の運営などの苦労話をされたのを覚えている。木枯さんは伊賀の表鷹見や他の人達と『星恋』創立をめざしていた頃である。次にお会いしたのは伊勢白子の誓子居訪問の時である。この時は珍らしく誓子先生が奥から出て来られ、「遠くからご苦労さん、丁度いま橋本さんも見えていますヨ」と言われた。この日のことはよく覚えている。庭に面した部屋で多佳子、波津女両先生が寄贈俳誌の数十冊を他の寄贈書籍と共に部屋一杯に広げて整理中であった。多佳子先生に久しぶりの挨拶をしながら「誓子先生が七月号（天狼）で今後の寄贈誌は発行所ではなく誓子居に変更を依頼する一文を編集後記に書かれたからですヨ」と話をすると「そうそうこれからが思いやられるワ」と笑って応えられた。とするとこの時は昭和二十五年の秋と断定出来るような気がする。この日は他の訪問客は無かった。

多佳子先生を悩ましてきた『七曜』の内紛は榎本冬一郎さんの他結社設立と共に円満な解決となった。単独主宰の多佳子『七曜』は天狼系誌の中で群を抜いて発展し、多佳子→堀内薫→橋本美代子と続き今日なを存在感を維持していることは衆知の通りである。私の場合『天狼』で勉強中なので『七曜』へは協力するものの同人は辞退した。これは薫氏没

海の上寒し眼をやるさへ寒し　東京　八田　木枯
愛されて末枯に犬動きつづけ　愛知　田口　武司
焚火音激ししづかに馬の胴　工場に蒸氣満ち満ち寒夜なり
寒柝にひかりを返す花崗岩　鈴鹿　藤内　薄暮

後までつづき美代子時代に入った時は『天狼』廃刊、誓子先生も逝去なされていたので『七曜』同人となり自選句を発表した。しかし健康上の理由で数年で退いた。美代子さんとはいまも文通は絶やさない。

多佳子先生の健康上の危惧は昭和三十五年頃からで『七曜』誌上にも書かれていた。そして僅か三年弱の昭和三十八年に死去。未だ若い六十四歳の生涯であった。あの気品のある美しい容姿はいまも忘れることが出来ない。

辺見じゅん氏は「冬の虹」―橋本多佳子の最終章で次のように書かれている。

（前文略）「看病疲れでいつの間にかベットの端で眠ってしまった美代子が気付いて顔をあげると、多佳子は娘をみつめ、「眠ってもいいのよ」と言うように、頬を撫でるようにした。それは母多佳子の娘によせる最後の仕種だった。

昭和三十八年五月二十九日午前〇時五十一分、多佳子はついに肝臓癌のため死去した。

駆けつけてきた師の誓子は、多佳子の顔を覆った白布をめくり、

「いつもの顔と少しも変っていないね」

と、呟いた。そして

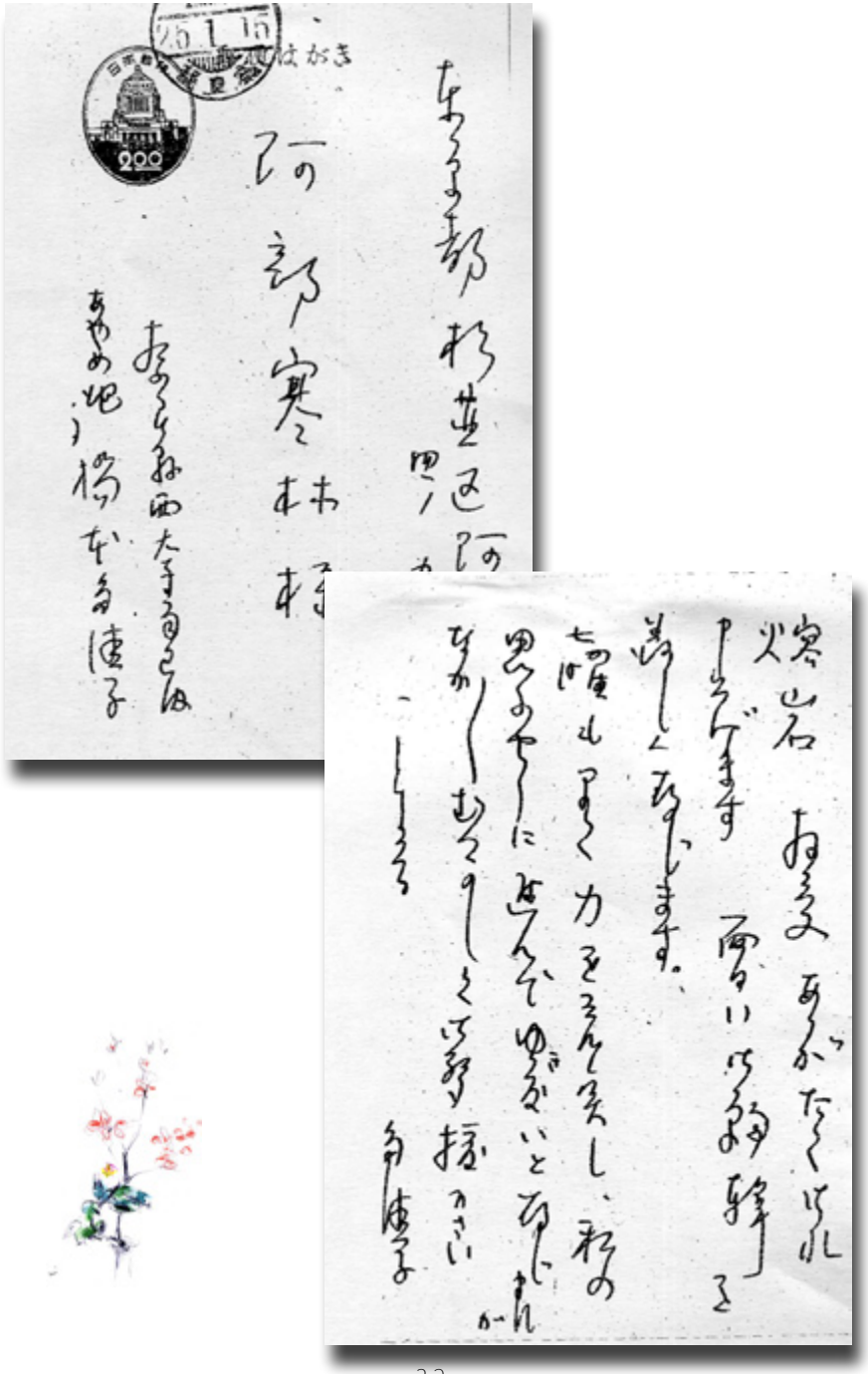
「あんなに俳句を作りたがっていたのに、あの世へ行っても作りや」

と、嗚咽しながら言った。

死の床にあった多佳子が書き遺した短冊には、

雪の日の浴身一指一趾愛し
雪はげし書き遺すこと何ぞ多き

という句が書かれてあった。



自詠自読

踏切といふ冴えかへるところかな　じょう

能登半島の、私の住まう日本海側沿岸には鉄道が敷設されたことがありません。地形が険のためなのですが、それにも拘らず私には随分と踏切の句が多い。

今から何十年もむかしのことです。ぼんやり運転していたのでしょう、前の車に蹤いてうっかり踏切に入ってしまったのです。渡り切ろうとした時、前方の渋滞のために踏切内で私だけが停車を余儀なくされた、と同時に踏切の鐘が鳴り始めたのです。遮断機の下がりきる寸前に何とか渡り切ることができましたが、その時の体験がトラウマになって、未だに踏切を渡る時渡り切った時背中がぞくぞくします

し、廃線路の踏切跡でさえいい気持がしない。〈廃線路踏切あとのすがれ虫〉は全く頭で作った句なのですが、句会では入点がなかった。当然です、踏切への感じ方が私だけのものなのですから。そしてその際、あなたは踏切が好きだね、と言われて帰宅後調べたら、二〇句近くが句帳にに書き込まれていたのです。〈夜ぞ更くる踏切に月さし込んで〉も、詩的誇張なんだろうが踏切だけにさし込むという表現がいま一つ評価しがたいところだ、といわれたのでした。

どうも私には、句材に困ると遮断機や踏切をとりあげる僻があるらしい。〈踏切にせかれてゐるは蝮捕り〉もあるのです。そして掲句。金沢市内にあるＪＲ駅の、すぐ傍の踏切を渡った時の実感を詠んだもの。自信ある句とはいえなかったのですが、喜孝さんがとりあげてくれたところをみると悪くない作なのだろうと。

梅いまだ九八屋は閉ざされてあり　藤　穂

小石川後楽園は江戸時代の初めに水戸徳川家の祖頼房が中屋敷として造り、二代藩主の光圀の代に完成した庭園で、回遊式築山泉水庭園です。

その中に九八屋という茅葺きの古い建物があって、吟行で始めて行った時は開いていて中まで入ることが出来ました。うろおぼえですが幅三間長さ五間位でしたか、がらんとした小屋の真中に今風に云えばテーブルでしょうか、しっかりと作りつけの大きな台があって、三方に壁にくっついた長い腰をかける場所がありました。そこはお邸に勤務していたお侍の休憩所だったのでしょうか。

そこに面白いことが書いてありました。お酒を飲む心得です。昼は九分注ぎ夜は八分というので、その名も九八屋と名付けられたようです。私は長い事、なんで昼より夜の方が少なく飲むのかと不思議だったのですが、そういうことではなくて、夜は暗いから注ぐとき八分目にしなさいという事だと解りました。随分細かい指示ですね。それだけお酒が貴重だったのでしょうかね。丁髷を結ったお侍達がここに出入りしてどんな風にお酒を飲んだのかなあと想像すると、今のサラリーマンの集う居酒屋ともだぶって面白い。それにしても昼酒も飲んでいたんですねぇ。

二度目に句会で訪れた時九八屋は入口も出口も閉っていて入れなかった。あの時は梅もまだほんのちらほらしか咲いていなくて残念だった。この句はその時に出来た一句ですが、今思えば〝花は盛りをのみ見るべきものかは〟の古人の言葉のように、ちょっと残念でしたというのもまた風情があるのかもしれない。九八屋も、一度は入(はい)れて次は閉っていたというのも、二つの姿を見せてくれたということかもしれない。

ちなみに九八屋は今改装工事中で、今年一杯開かないという。あまり新しく綺麗になってしまうとつまらないな、などと私は心配している。

後楽園の梅は、もう今年は盛りを過ぎてしまったでしょうか。

（三月二日記）

蕗の薹ほほけてさうだ街に用　じょう

ある早春の夕べのこと。友人の食卓に蕗のとうの料理が出たそうです。そして奥様がいいました。すこし高かったけど思いきって買ったわ、と。

友人は目を丸くしました。なぜなら、その庭先、家裏に沢山の蕗のとうが芽ばえていたからです。「僕がどれだけ稼いでも金がたまらないのはこういうことなんだ」と言ってやった、といいます。

この話は彼らが二十歳代のこと。いま現在の奥様は、蕗のとうやその親の蕗は無論、山菜に関しては年中食しうるように塩蔵、冷凍その他の手だてで、私なんかも裾わけに与っているのです。

蕗の薹は、日当たりのいい処なら二月初旬に雪のあいだから伸びだします。そんな場所の蕗のとうは二月中旬にはほおけてきます。人の暮しの、雪ごもりから解放される季節。

返信のおほかたを否に冬籠　橋　閒石

は、夏冬の出不精感を詠んだものでしょう。拙句の「さうだ街に用」は、開放感、そんな心持をいったつもりのもの、なんですが。

ペダル踏む東風に向へば潮の香　桂　子

冬の間吹き荒れていた西や北からの風も、三月の下旬頃より東や南東の風が吹く日が多くなって来ます。明日は多分雨だろう、天気予報も雨と放送された午後からは、東南の風が強く吹きます。

私は町の中心に出かける時は、車の多い町の中央の東西の道は避けて、自転車で川の堤防を漕いで行きます。

私の住まいから東へ二キロメートル余には伊勢湾の海岸で、常日頃利用する堤防は海へ続き河口は小さな漁港になって居ります。

特に東南の風が強い時、その二キロメートルの間に国道一号線、名泗国道が走る故の幹線の混雑の臭いに、たっぷりと湿気を含んだ海風の微かですが確かに潮の香りが、風に流されて漂うて来ます。

セロリトマト食べ三月を迎へたる　幸　江

寒い寒いと食卓には湯気の立った鍋や汁物がそろそろ食べあきた時から春が始まる。

まず体の中を清々しい清潔な身体にリセットする。黙っていても気持が青々しい生食に憧れている。

店先に溢るるキュウリ、トマト、セロリ、新玉ねぎ。自転車の前カゴに山のように買い、まずセロリを何も付けず一口食べる。一本がまたたくうちに食べつくす、次はトマト。これもセロリと同じ丸ごと囓り、一度に二ケがお腹に入った。

肩の力が抜けてゆく、窓の外を白い雲が西を目指しながれている。

今日が私の春の始まり、遠く雪の残るやまがみえる。

春の雪篩骨兵器となりたる日　恭　子

東京から福島の三春町に疎開した。今では桜で有名になってしまったが、疎開した頃は本当に片田舎だった。母の実家の離れに住みついた。そこには全く戦争をしているという気配さえ感じさせない穏やかな日々の暮らしが待っていた。母は毎日東京でやっていたようにミシンを踏み、私は祖母がやっていた蚕を見たり絹の糸繰を見たりと暇はない。時にじいちゃんのところに行ってアイロンに炭を入れるのを手伝ったり（邪魔したり）して毎日が快適だった。と今は思っている。東京では味わえなかったことが沢山あった。

あれから何年経つのであろうか、今何処かで争いごとが起こさせよう?とする気配がなくはない。何にでも争いごとに使えば兵器というものになってしまう。人間の体は秘密兵器の塊のようなものだ。雪のように時間が過ぎると（特に春の雪）影も形もなくなり元の穏やかな状態にかえる。そんな日が未来永劫私達の大事な子供孫そのまた子供と続いていけたらいいなーと。老人の繰り言にならないように祈っている。

練炭のにほふ炬燵か嬉しくなる　石　動

日本の家庭の暖房方法も、どんどん変化して、都会的（?）になっている。されど炬燵だけは「俺は不易だぞ」と頑張ってくれている。しかし、今は電気炬燵が主流か?

昔は、炭団・炭が我が家の定番。安い炭を使っていたのだろう、パチパチとやたら爆ぜた。練炭は煮炊きの主軸。あの匂い、青白き光。懐かしい。

或る日、所要で、市内の奥地（田舎たる大月の内の、さらに田舎）に住む人を訪ねた。何と懐かしい香りが。『うひゃあ、練炭の炬燵だ。』もう、懐かしく嬉しく、心も温まった。

つくづくとものはじまる火燵哉　鬼　貫

吉野見た足可愛がる炬燵かな　希　因

思ふ人の側へ割込む巨燵哉　一　茶

火の気なき炬燵の上の置手紙　岸田今日子

家中の足を集めるこたつかな　小学６年

京の旅

篠田純子

幾松

細長き路地に風行く夏暖簾
たかんなの染め抜きのある夏暖簾
打水する仙台平の見えかくれ
幾松のからくり天井新樹光
刀の鍔壁に埋めあるあをもみぢ
勤皇の寄り合ひ場所の薄暑かな
仙台平の給仕は凛と夏座敷
鴨川でランチまくなぎ舞ひどほし

永観寺

白鷺はダブルダッチを見に抜き足

姿無く河鹿は頻り永観寺
板壁を登る蜻蛉の翡翠色
残る鴨琵琶湖疏水に一羽二羽

湖東三山

蝉丸トンネル抜けこれやこの新樹光
鉈彫りのそそけか髭か青紅葉
薬指立てくわんぜおん春愁
よく見れば頑是無き苗日の盛り
蟻の列ひゃくさいじへと杖つきて
鐘撞きて春愁といふトンネル抜けた
信長に焼かれぬ仏桜の実
秘仏観てご馳走食べて生ビール

東寺

炭化して腕なきほとけ青葉闇
青葉風宮本武蔵の描く竹
あを時雨大日如来の口赤し

あとがき

「わが敬愛する俳人たち」の今月は橋本多佳子。読手もその場にゐるやうな感覚になる筆致で楽しませていただいてゐる。あの世へ行っても作って居そうな俳人が私の周辺にいっぱいゐたし、ゐる。橋本多佳子の写真は手元にないので、書庫（階段の壁）から昭和二十六年三月号の『天狼』を探した。「虹の環を以て地上のものかこむ」ほか誓子は虹の句ばかり十句発表。本が毀れぬやうひらくと三鬼が随筆のなかで五十歳と書かいてゐる。遠星集の巻頭は津田清子。木枯・寒林両先生の名前も発見。カットにその部分を複写した。それにしても橋本多佳子の話になると、どなたもテンションが上がる。ご多分に漏れず高島茂も少年のやうにあくがれの人の事を話すやうだった。今このやうな雰囲気の女流俳人はどなただらうか

句会で「微睡むる人」が問題になった。違和感があるといふのである。「微睡める人」の方が読みやすいといふ。私は連体形だから〝る〟で送ってもいいのではと思ったが保留にした。帰って調べると終止形と連体形は同じであった。このはなしを定梶じょうさんは今月の随筆で書かれたのだらう。〝まどろむ〟と〝まどろめる〟はどう違ふのだらう。不安は永遠につづく。

ご厚志多謝

森　理和　様

二〇一四年六月号

発行日　五月二九日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。